

昭和35年10月15日

三宮駅前に華々しくオープンした

神戸新聞会館――

その1階の「秀品館」の一角に

田崎真珠の小売店第一号である

「田崎真珠店」が開店した

田崎真珠店

しかし「高価な真珠がはたして
日本で売れるのだろうか」
「小売店は手間がかかる割に
利益が少ない」――

社内ではそういった消極的な
意見もささやかれた

海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

～King of Pearl～ Syunsaku Tasaki Story

田崎俊作物語

〈第九話〉

漫画：佐藤晴美



当時、日本の真珠の約90%が外国人バイヤーによって買われ海外で製品化されて売られていた。

日本でも
真珠を売るためには
何が必要か

田崎は真珠の養殖から加工販売までの一貫メーカーとして最終的な消費者のニーズを知り応えることが重要だと考えていた

田崎真珠の真珠取り扱い量が
増えるにつれ、加工場の増築も
必要となつた

狭い事務所に
営業と加工場とが
一緒になつてゐる

これでは増え続ける業務に
対応できない

成長する
若いエネルギーを
狭い事務所に
閉じ込めておくのは
経済的にも
マイナスではないか

そうだな
これからどんどん
大きくなる世界の真珠
市場に対応するためには
経営を組織化することが
必要だろう

そこでだ
新しい土地を見つけて
新しい加工場を
建てようと思う

おお

なるほど

海外視察後
優秀な人材が必要と
考えた田崎は大村中学や
海軍兵学校時代の友人に
声をかけてもに働いてもらい
何でも相談した



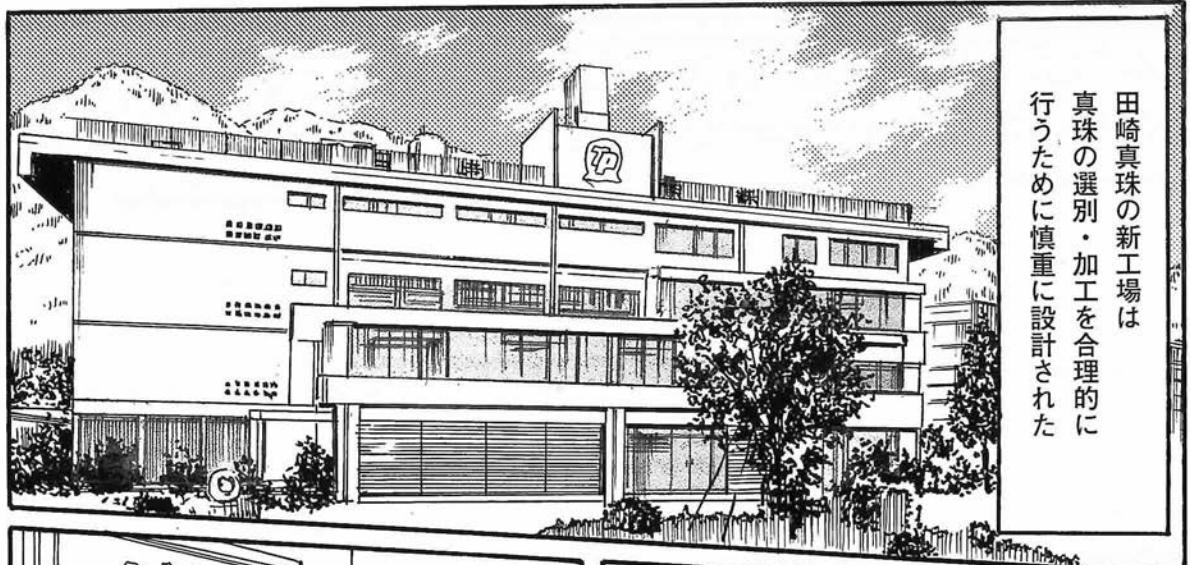


神戸は――
真珠を選別するのに
とても良い場所なんだ

光が
やわらかい

六甲台の新工場は
昭和38年に竣工した





田崎真珠の新工場は
真珠の選別・加工を合理的に
行うために慎重に設計された



この工場には

開設と同時に研究室が置かれ

真珠を加工するさまざまな工程の

機械化への研究が行なわれた



珠に穴をあける機械は
田崎真珠のオリジナルである

ふるいわける機械など
真珠の大きさを

現場の声を取り入れて

工場内のほとんどの機械が
独自のものとなつた



田崎の構想は次々と実現し
田崎真珠は大きくなる
真珠市場に対応していった



田崎真珠は
オープニングする
1年前から
ミス・ユニバースの
協賛事業を
行なつていた

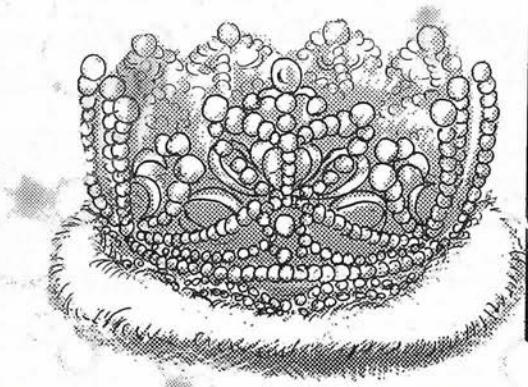
こんな逸話がある
それは田崎の夢に
関連していた



それなら
世界一の美人に
プレゼントする前に
ぜひ日本一の美人に
真珠をプレゼント
してください！



そして
ミスユニバース
日本代表の頭上には
田崎真珠の王冠が
輝くこととなつた



昭和38年にミス・ユニバース日本代表の
児島明子が世界大会で優勝し

「世界一の美人に真珠をプレゼントしたい」
という田崎の夢は早くも実現することとなつた



神戸新聞会館秀品店に
第一号店を開設した翌年
当時の池田首相が

所得倍増計画を打ち出し
家庭製品は高級化し
レジャーなどにお金をかけ
日本の消費支出が大きく
変化していくこととなる



看板

出石 アカル

題字・菅原洸人
絵・菅原洸人

「ひさしを貸して母屋を取られる」という言葉があるが、わたしがそれだ。

喫茶『輪』は、20年前にオープンして以来、二度店舗を拡張している。

最初は客席わずか11の小さな店だった。それまでわたしは米屋をしていた。木炭、練炭、豆炭（なつかしい商品名だ）なども扱っており、それを在庫するための倉庫が隣接していた。それが時代の流れで不要になり、改造して喫茶店にしたのである。

当初は家内が友人一人に手伝つてもらひながら営んでいたのだが、すぐに手狭になり、米屋の一部を譲つてやつた。

それから数年するとまた、喫茶店のお客さまがあふれるようになってしまった。

わたしはついに決断。米屋を廃業して明け渡し、マスターとして家内に雇つてもらうことにした。

見事に「ひさしを貸して母屋を取られ」たのである。

そんな事情もあって『輪』はスペースが二つに分かれている。狭いころの暖かみのあるイメージを壊さないように工夫して拡張したからだ。

店に入った所の感じは以前と変わらない。しかし奥へ行くと別のスペースがある、という仕掛けだ。初めてのお客さまは「アレッ」という顔をされる。思いのほか広いんだ、と。

そこに、水彩、版画、油彩などの小品十数点を飾っている。すべて菅原洸人さんのおしゃれな作品だ。昼食時以外は、ちょっと上品な落ち着いた場所である。静謐と言つていい。休日にわたしはそこで一人、文章を作る。ぜいたくな話だ。

* *

「おもしろいものを作つてきました」とやつて来られたのは洸人さん。

大きな袋からソロリと取り出されたのは、『輪』の看板だった。入り口のタイル壁にかけるようにと。

タテ35cmヨコ44cmの分厚い木の板の真ん中にコーヒーカップが描かれており、その両側には、なんとわたしと家の似顔絵が描かれている。それがあまりにも似ていて、妙な気分。と言つても写真のような絵ではなく、なんともほのぼのとしていて、わたしは思わずニンマリしてしまう。

あの田辺聖子さんのご自宅の地下室は飲み屋風になつていて、そこには似顔絵看板があると聞く。

カモカのおつちゃんが元気なころは、いつも常連さんで賑わっていたのだと。

田辺さんの本、『おせい＆カモカの昭和哀惜』（文春新書）を最近読んだのだが、そこにその看板の写真が載っていて、表裏にお聖さんとカモカのおつちゃんの似顔絵が描かれている。

「次の店へいこう！」と、ひとりが叫ぶと看板は裏向けにされるのだと。『パークカモカ』から『スナックお聖』に。それがなんとも愛らしい絵で、コレいいなあと思つていた矢先だつた。

洸人先生、「輪」のために、それに負けない看板を作つてきくださつた。お願いしていたわけではない。願いが通じたとしか思えない。

店頭のタイル壁には、素人ではクギが打てない。幸い常連さんはタイル職人さんがおられる。頼むと快く工具を持つて来てフツクを取り付けてくださつた。

店頭が明るくなつた。いやでも目につく。少し照れ臭い。

入つて来られたお客様が、まじまじとわたしの顔を見て、「似てるなあ！」とうなつてゐる。なかには「ブツ」と吹き出す人も。

さて、タイル職人の丸豊さん。年よりもお若く見えるが、実は55歳。やさしそうな童顔で、いかにも女性にもてそうな人だ。



「あのころ、うちの子はぼくのこと、えらい働き者やと思てましてん。いつも仕事ばっかりで、ほとんど家におらへん。正月でも仕事してるとばかり思てましてん。偉い父ちゃんやなと。虹色のアワが消えてからはおとなしななつて、今はもう、休みの日は孫の遊び相手してます。夏はトンボや蝉やカブトムシ取りに連れて行つたり。そやけど、この子が大きくなつたらまた、一緒に夜の昆虫採集にも行つてみたいなと思わんこともないけどね」

この丸豊さんが座る席は、奥の静かなスペースではなく、多くの常連さんが好む入り口近くのにぎやかな席である。
ピミョー。
ところで看板である。
さすが画伯、一応女性である家の顔は少し若めだ。「看板に偽りなし」というには、ちょっとそこまで看板である。

■出石アカル（いだし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」（同人、兵庫県現代詩協会会員。詩集「コヒーラップの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回フルーメール賞文学部門受賞。）

『神戸異人館物語』

夜明けの ハンター



ハンター肖像

三条杜夫
絵・谷口和市

昇り竜

明治四年一月一日、エドワード・ハズレット・ハンターと平野愛子との間に生まれた赤ちゃんは男の子だった。ハンターに似て目鼻立ちのきりりとしたかわいい赤ちゃんである。

「オ父サン、名前ヲ付ケテ下サイ」

ハンターが常助に言つた。

「私に名前を付けさせてくれるのは、大変嬉しいが、ハンターさん、あなたの血を分けた子供です。しかも、日本に命を預けたあなたの大切な子供です。あなたの想いもこの子に託しましょう」

常助は共に名前を考えることを提案した。

する

「愛子ガ産ンデクレタベイビーデス。愛子ノ意見モ聞キタイ」

レディーフーストの国に生まれたハンターらしい対応である。愛子は答えた。

「丈夫で大きく育つてくれるような名前がいいですか」

日本には男の子を象徴する太郎という名前がある。それに加えて、ハンターならではの想いを付け加えたいとハンターは考えた。

「私ノ名前ノハンターハ、狩人トイウ意味ガアリマス。狩猟民族ノヨーロッパデハ、色々ナ狩猟ヲ

シマス。デスガ、絶対ニ狩ルコトノデキナイ動物
ガアリマス」

遠巻きにハンターや愛子、常助らの様子を伺つて
いた番頭や丁稚たちが興味深い面持ちで身を乗
り出す。

「絶対に狩ることの出来ない動物？ わかるか？」

「馬鹿をお言いでのない。虎は加藤清正が退治した。
虎か？」

「馬鹿をお言いでのない。虎は加藤清正が退治した。

「うーん、何だろう？」

番頭や丁稚たちが真剣に考え抜く姿を横目に見
ながら、ハンターが言う。

「ドラゴンデス。日本ノ言葉デ言エバ、竜デス」

「竜ですか？」

常助が目を輝かせる。

「竜はいい。夢の動物だが、縁起のいい動物だ。
昇り竜は特に勢いがあつて最高のものだ」

愛子も目を輝かせる。

「竜をこの子の名前にしましようか？」

ハンターがうなづく。

「ドリームノ動物、竜ト日本ノシンボル的ネーム
ヲプラスシテ竜太郎トイウノハドウデスカ？ オ
父サン」

常助が手を叩いて喜んだ。

「竜太郎か？ これはいい！」

家中から拍手がわき起こつた。

騒ぎを聞きつけて菊子が顔を見せた。ハンター
が言う。

「オ母サン、ペイビーノ名前、竜太郎デドウデシ
いく。」

「ヨウカ？」

「竜太郎、ですか？」

「聞きたれて、すぐに

「いいですねえ、強い男の子に成長してくれそ
うで、とてもいい名前ですねえ」

と菊子は満足げである。

「オ母サンガ了解シテ下サレバ、竜太郎ニ決メタ
イト思イマス」

そこでまたもや、座敷中に拍手が起ころ。かく
して、ハンターの第一子の名前は竜太郎と決定し
た。この子がのちに日本国籍を得て、範多とい
う苗字を考案し、範多家を興す。この時点ではまだ
戸籍制度は日本に存在しておらず、名前を公に登
録する必要もない。

一般に名前を付ける風習は室町時代にめばえ、
宗門別帳や寺の過去帳に庶民の名前を記録するな
どしてきたが、明治四年四月に太政官布告として
戸籍法の制定を発表し、翌五年から実施される。
この年がひのえさるの年であつたことから壬申戸
籍と呼ばれるようになる。竜太郎は壬申戸籍のう
えでは平野竜太郎として登録され、成人して自分
自身が範多家を興すまでは平野竜太郎として通す。
このようにやつと戸籍制度が作られようとしてい
る時代であり、英國人のハンターが日本の戸籍に
登録する制度もなく、ハンターと愛子の結婚は今
にいう戸籍上の結婚ではなく、実質の結婚であつ
た。しかも、ハンターと愛子の国境を越えた結婚
は日本における国際結婚第一号として記憶されて
いく。

学からいつても噂は派手な方がよい。

「竜ヲネーミングニ利用シタコト、OKデシタ」

と自分のビジネスパートナー、ハンターの名前

の付け方に上司として後日、大いに満足するキル

ビであつた。

「一度は死にかけた愛子が、こんな元気な男の子を生んだのだからなあ」

常助が感慨ひとしおになるのも当然である。

「素晴らしい名前も決まってこれほど目出度いことはない。命名祝いの膳じや。番頭さんも丁稚たちもみんなで祝つておくれ」

常助が屋敷じゆうのみんなに祝いの膳を用意した。黒鯛・チヌの尾頭付きが分けへだてなく、みんなにふるまわれた。

「大阪湾・チヌノ海ニ泳グ魚デスネ」

ハンターが感動した。五年前、初めて兵庫にやつて来た時、身を寄せた大工の留吉の家で、タネが祝いの膳に用意してくれた魚である。横浜から兵庫に移つて新境地を開き、妻帯して、今、二世まで持てた。誰よりも喜びを噛みしめているのはハンター本人であった。我が子出産の祝いとして妻・愛子と共に味わうチヌは格別にうまかった。そのうちに、西宮郷の酒までふるまわれて、平野家の屋敷は祝賀一色に盛り上がつた。

竜太郎誕生の噂はすぐに大阪中に広まつた。

「平野商店に竜が来たらしいゾ」

「青い目の婿はんの次は竜か?」

「昇り竜の平野は一体どこに行く気なんじゃ?」

噂が噂を呼んで、平野商店の名前はいつそう知名度を上げていくのであった。キルビーの経営哲

愛子の産後の体が落ち着くのを待つて、ハンターシばらく経つて、キルビーが竜太郎のお披露目パーティーを催してくれた。居留地十四番館が久しぶりに活気に満ちあふれるのであつた。キルビーの呼びかけで集まつたのは、米田講師、留吉、タネ、稻次郎、それに秋月。誰もが我がことのように喜んでくれるのだった。

このころの日本の人口は三千四百万人ほどであった。ちなみに江戸時代初期の人口はわずかに千五百万人。江戸末期に三千万人となり、明治五年の壬申戸籍が出来たころには三千四百八十万人と記録されている。

ここで参考までに日本の人口の変遷について記させていたくと、奈良時代には日本の人口はわずかに四百五十万人程度であったといわれている。平安時代は五百五十万人。慶長時代(一六〇〇年)に千二百二十万人となり、江戸時代に三千万人を越えた。明治末期に五千万人を越え、昭和十一年には江戸時代の倍の六千九百二十五万人に増加している。戦後の人口増は著しく、昭和二十三年に八千万人となり、同三十一年には九千万人となり、同四十二年に一億人を突破した。そして平成十五年、一億二千七百六十万人と記録されて今日に至

つてゐる。

当小説の舞台となつてゐる明治四年、この時の日本の人口はざつと三千四百万人。その中でもきわめて珍しい日本と英國の混血の赤ちゃんが竜太郎である。集まつた誰もが興味津々で竜太郎の顔を見つめるのも無理はない。大阪の平野家で菊子が特別腕の立つ取り上げ婆さんを依頼しての出産であったが、熟練の取り上げ婆さんでさえ、びっくりしたほど顔立ちの整つた赤ちゃんである。ハンターに似て、日本では見られぬほど鼻筋が通つた端整な顔立ちの男の子である。

「愛子さん、ちょっと私にも抱っこさせて下さいよ」

タネが竜太郎を抱っこする。気持ち良さそうに目を閉じたままの竜太郎に

「かわいいねえ。イギリスと日本の友好のあかしだよ」

と語りかける。そんな和気藹々のムードにキルビーは満足である。ハンターより年上の自分自身が妻帯を考えるべきかも知れぬ意識がちらつと頭をかすめる。しかし、今のキルビーは事業に全身全靈を打ち込んでいて、個人的に親しくなる女性とめぐり会う機会もない。

「サア、皆サン、モウスグ、大井肉店カラ牛丼キマス。スキヤキパー・ティ・シマ・ショウウ」

走人村の西を流れる宇治川の閑門の少し西に最近、「月華邸」とは別のある新しい肉店がお目見えしていた。西国街道に面して「大井肉店」と掲げた看板がひときわ目立つ店構えであった。四年前の

慶応四年から明治元年にかけて、キルビー商会が日本で初めて牛肉を販売するビジネスを立ち上げ、もともと牛肉を食べる習慣がなかった日本に牛肉を食べる習慣を植え付けたキルビーとハンターであるのを機に、キルビー屠牛場兼牛肉販売所を開鎖した。が、二人の活動の後を受けて牛肉ビジネスは日本に定着し、生田川の東にヨーボーが経営する屠牛場が出来たのに続いて、日本人が経営する鳥獸売り込み商社も誕生したりして、牛肉文化の輪はしだいに全国へ広がり始めていた。事実、東京でも屠牛場が造られたり、横浜では牛鍋を食べさせる店が複数誕生して、関西の「すきやき」に対しても屠牛場が造られたり、横浜では牛鍋を食べさせた店が複数誕生して、関西の「すきやき」に兆しを見せ始めたりしていた。

そんな折りに、走人村の農民、岸田伊之助が二十二歳の若々しい感覚を活かして斬新な店を構えたのであった。この大井肉店は繁盛をきわめて、明治二十年ごろに、歴史に残る店舗を建築する。二階建てのバルコニーを持つ洋館で、白い漆喰壁に半円アーチの窓を持ち、ステンドグラスをはじめ込んだしやれた造りで、ひときわ一目を引く建物である。この建物がのちに、日本でも記念すべき初期の牛肉店として愛知県犬山市明治村に移築され、後世に語り継がれていくこととなる。

「ソロソロ、牛肉ガ届クコロデス。稻次郎、炭才コシテ下ササイ」

キルビーが言う矢先に、一人の男が十四番館に姿を見せた。小柄でずんぐりと丸い体つきの男性

が荷物を持ってやつて來たのである。その体つきから「バケツ」とあだ名されている大井肉店の経営者、岸田伊之助であった。

「大井肉店です。このたびはおめでとうございま

す」

いかにも商人らしく如才ない。岸田は農業に精

を出す時はボロをまとい、身を粉にして働いた。なりふり構わず働く姿に親しみやすさを覚えて誰いうともなく、このころ水を入れる容器として普及し始めていたバケツをイメージしてあだ名が付けられたのであつた。

「オウ、ミスター・バケツ、サンキユーベリーマ



ツチ

キルビーが手を差し出して暖かく迎える。自分がこの国に一石を投じた牛肉文化の普及にこの男が一役も二役も買つてくれるのかと思うとキルビ

ーがパケツに期待を寄せる気持ちは当然であった。

「ミスター・パケツ、竜太郎ノ顔、見テ下サイ」

キルビーが岸田を愛子のいる部屋へ案内する。「えらい評判の竜太郎さん、ひと目拝ませて下さ

い」岸田は愛子の腕の中でぱつぱつ大きな目を開けている竜太郎を一目見るなり

「おう、かわいい！」

と大きな声をあげ、まるで愛子の顔をいつそう丸くほころばせた。ハンターが挨拶する。

「岸田サン、私ノ妻デス」

愛子が竜太郎を抱いたまま、会釈する。

「愛子と申します」

「おめでとうございます。キルビーさんとハンターサンが始めた牛肉ビジネスにあやかって、大井肉店を始めさせてもらいました。その張本人の所へこのようにお肉を届けさせてもらうのは嬉しいかぎりです。竜太郎くんのかわいさに応えて、代金は特別に安くさせていただきます」

みごとなほど機敏な岸田であった。この商人の心意氣で大井肉店は地道にその事業を進め、日本の肉店の魁として名声を得ていくこととなる。

岸田は牛肉を届けるだけでなく、自らすきやきを作ることまでやり始めた。タネと稻次郎がそれ

を手伝い、うちとけた雰囲気が十四番館に満ちわたる。それ以上に充満し始めたのはいかにもおいしそうなすきやきのにおいである。

ほどよいところで、米田が会食前の挨拶をする。

「大海原の波濤をけたてて、異国の地にやつて来たハンターさんが、今、確かな命をここに誕生させました。その新しい命にハンターさんは、人間が夢に描いて、現実に見ることの叶わぬ竜を自分の二世として具体化されました。これまでのハン

ターさんの生き様に敬意を表し、前代未聞の異國のお人との結婚によって周囲の人たちにも大きな影響を与えておられる愛子さんの勞もねぎらつて、今日は心いくまでみんなですきやきを味わいたいと思います」

その言葉を愛子が胸つまる思いで聞いた。秋月が古武士然として言葉を添える。

「日本女性の鏡として、竜太郎殿を立派に育て上げていただきたい。そのためには必要な力添えはここで集まつたみんなでさせていただきます」

冬から春へと季節がゆっくりと移りいく居留地の十四番館は、生後二ヶ月の竜太郎を中心には周辺の善意の糸がいつも強く結ばれるのであった。



三條社社長（さんじょう・もりお）
フリーランサーや放送作家。ルボラ
イターを経て、放送業界へ。経験にもと
づく地域活性化講演としての活動も評価
されている。著書に「いのち結んで」「宝
の道七福神めぐり」、「そうゆう人たち」
など。

つづく

美味より神戸

懷石割烹

なが坂

『守破離の世界を季節感と共に』

カウンターは7席。素朴なお店づくりは、まるでご主人・

長坂俊明さんの料理に対する誠実さを見ているかのよう。

懷石料理の名店として名高い招福樓で修行をつんだ。「茶の精神を心とする日本料理」を

謳う、伝統にのつとったその料理は、椀物ひとつにしてみれば想像に難くない。出汁に浮かぶ鰯は、まるで白い花が開花したかのよう美しく艶がある。味も昆布の香りと相まって、芳醇で味わい深い。加えて松茸の香りと食感も秋の味覚に華をそえる。「ただ当たり前のこと」と長坂さん。丁寧に

落ち鮎の風干し、無花果、銀杏など秋の味覚を織り込んだ八寸

店内はカウンター7席のみ



上品な昆布の風味が、旬の食材を引き立てる椀物



な
が
坂

078-321-0718

神戸市中央区中山手通1-6-5 高ビル1F

[営] 12:00~14:00

17:30~21:30

要予約

[休] 日曜・祝日



ご主人の長坂俊明さん

盛り付けられたその料理は、品格すら感じさせる。口数は少ないが故に、言葉一つひとつに料理への真摯さが伝わってくる。料理人としての守破離の世界を季節感と共に愉しませてくれる。



東門筋を一本東に入る

美味より神戸

中国レストラン

蘇州

『眼下に広がる絶景とともに味わう、珠玉の中国料理』

2005年に上海料理のレストランに生まれ変わった「蘇州」。リニューアル前の広東料理のテイストを取り入れた創意工夫あふれる中国料理が好評を博している。この秋、オープン2周年を記念して、姉妹ブランドホテルヨコハマグランドインター

コンチネンタル ホテルの中華料理「驛驔」料理長、田村晃男氏による期間限定のスペシャルイベントが開催される。ともに中華街を擁する街「神戸」と「横浜」のコラボレーション。窓外に広がる神戸の絶景とともに、堪能できる「食の秋」にふさわしいイベントとなつている。

ヨコハマ グランド
インターナショナル ホテル
「驛驔」料理長 田村晃男



極上のフカヒレ刺身が楽しめるディナーコース

中国レストラン 蘇州 2周年記念スペシャル
田村晃男の“味と技の世界”
10月12日から21日まで

ランチコース ¥4,620(税・サービス込)
ディナーコース ¥12,705(税・サービス込)



☎078-291-1122

神戸市中央区北野町1

クラウンプラザ神戸 34F

【営】 11:30~14:30

18:00~21:30(土・休前日は22:00まで)

【休】 無休

<http://www.cpkobe.com>



10月14日(日)は田村料理長来店。

花々が香る空間で
夢心地をお楽しみください



ロダン

野田恵子さん（右）
みきさん（左）



店内のフロアから、湧き出
したかのような花々。ダイナ
ミックかつ繊細に活けられ、
全ての客席から視界に入り、
見る者的心を癒してくれる。
北野坂に面したFビル6Fに
あるクラブ「ロダン」は、オ
ープンして3年目を迎えた。「お
客様に納得していただける、
綺麗な女の子達がそろってい
ます。夢心地を華やかな空間
でお楽しみ下さい」と野田恵
子ママも自信をもつて話す。

information

ロダン

☎078-322-0308

神戸市中央区中山手通
1-8-14 Fビル6F



■ 営業時間 20:00~24:30
■ 定休日 日曜・祝日

■ 座席 30席
■ 料金 16,000円(80分)~



笑顔と饒舌なトークに癒される
ヒューマニティあふれるお店



ローズブルー

川原かおりさん(右)
松原さやさん(左)

東門筋を一本東に入ったサンモビル3Fにあるラウンジ「ローズブルー」。今年8月には、店内をリニューアルし、上品な色使いの大人っぽい雰囲気に。松原さやママは、人懐っこい笑顔と明るさが魅力の美女。「お客様にとつて、心の揺り所となるお店にしたい」。ママの笑顔と饒舌なトークに癒されに訪れるお客様も多いとか。ヒューマニティあふれるお店である。

information

ローズブルー

☎078-321-9785

神戸市中央区中山手通
1-7-3 サントモビル3F



■営業時間 20:00~翌1:00
■定休日 日曜・祝日

■座席 25席
■料金 13,000円(120分)